

ロベルト・ムージルについての ひとつの試み

「結びつき」における新しい体験

古 井 由 吉

新しい体験をえがき出す事、これが現代作家の第一の欲求であり、また、存在の理由でもある。自分の現に住む世界の中で人間的に不可能だとされているものを、なおかつ十分に人間的な体験としてえがいて見る事、また、ただ異常な出来事として精神のそとにおかれているものをいちど内面的なものでみだして見る事、そのような試みへの衝動に責められていない作家は、ことさらに現代作家として評価されるべきでない。真に現代作家らしいものをあたえるのは、熱狂的にせよ、ひややかにせよ、体験の拡大への突破口をうかがう、あのほとんどエロティックな緊張なのである。

このような緊張は、現代の風俗作家たちの、ことさらに異常な出来事を、ことさらに煽情的な効果をもとめる執拗さの中にも、やはり存在する。彼らの煽情的なものは、多くの場合、彼らの経験が語るという出来事そのものより、むしろ、おかし難いとされているものをあえて幾重にもおかさせて見るという、不安な内面の操作より来るのである。ただ、その内面は出来事が思わせるほどに、懐疑的でも、虚無的でもない。むしろ懐疑的な精神性によってはまだおかされていない、現実の価値の中に十分な安住を見出している内面が、ある現代的な不安と期待にうながされ、異常な効果をあやつるのである。しかし、このようにしていったん生れた出来事は内面を圧倒し、沈黙させ、いわばおき去りにして、ひとり極端まで展開してしまう。

しかし、そのようなものと対照をなして、出来事を産み、出来事に影響される能力を失った内面がある。いわば内面的閉鎖というものであり、現代において、いわゆる「内面性」のきわめて陥りやすい状態である。一般的にいて、内面性というものは、ある民族の特質として考えられたり、広く人間存在の深みに根ざす生き方として考えられた場合よりも、近代精神の、現実克服の態度として考えられた時、おもい意味を持つ。それは社会的現実に対して精神的現実、出来事や経験の現実に対してイデーやシムボルの現実を主張し、それによって近代世界に対するひとつの克服の行為であった。しかし、それはやがて働きかけるべき世界を見失って、もはや行為でなくなると、ひとつの閉鎖、それ自身の論理をもった現実における閉鎖となった。とくに、世界が急激に新しい様相を呈しはじめた時、閉鎖はあらわになる。内面性は出来事を通じて、新しい現実を体験することを知らない。出来事は時間と偶然に支配されており、認識の真の対象となり得ぬ、という態度

ははじめにそうであったような、現実の克服ではなくなって、出来事への無頓着と無能になってしまったのである。そして、そのように内面性より見捨てられた処で、出来事はただ異常な、irrational なものになってしまうのである。

だが一方、内面性はこのような状態より、自己の論理を極端までおしすすめることによってのみ、自己を救おうとする。つまり、極端における自己崩壊を通じて、絶対の虚無を通じて、未知の現実を完全に内面的に体験しようとするのである。だが、どのようにしてその極端は越えられるのだろうか。そこにはもはや出来事はない。それ故、出来事の体験によって、自己の認識や論理をこえるという、人間にとって親しいやり方はそこでは不可能である。何かまったく未知な、精神的な体験が必要なのである。もしそれがないとすれば、論理の徹底と自己崩壊と救済というの、またひとつの論理に過ぎなくなる。

オーストリア人作家、ロベルト・ムージル（1880—1942）はそのような内面性の危機より、もっとも誠実に、新しい体験を求めた作家であった。数ある内面的な作家たちの中で、彼をいちじるしいものとするのは、彼の出来事（das Geschehen）に対する驚きである。内面においてはその実現を想像するだけで存在を根もとよりゆすりそうなのが、つまり、内面的には《不可能》と思われることが、実際に起る、しかも、何ごとでもないようになめらかに起るという事、それはムージルにとって真に驚くべき事だった。勿論、これは直接的に出来事に向けられた関心ではなく、むしろ内面に向けられた関心である。だが、多くの内面的な作家と違って、彼は出来事と内面とのこのような不条理な関係より、出来事に対する拒絶の正当性を引き出して来ることはしなかった。そればかりか、この不条理さの認識のもとで、はじめて彼の新しい体験への精神的な欲求は強くかき立てられるのである。

たとえば、彼の教養小説風の作品「寄宿生テールレスの昏乱」（Die Verwirrung des Zöglings Törless, 1906）の中、盗みを犯したある美少年が彼の秘密を握った仲間たちに恥しめられる場面で、主人公テールレス少年は彼に順番がまわって来た時、その美少年にむかって静かに、ほとんど親しげに「ぼくは泥棒です、といい給え」という（Seite 79）。彼は、なぜではなくて、どんな風にそれが起ったのか、そのとき少年がいったいどんな気持だったのか、知りたかったのである。⁽¹⁾ 盗みという汚恥に身を落す時の、全身をゆするときめき、それは彼にはあまりに鮮やかに思い浮べられた。だが、眼の前には当の少年が、そんな震憾とは何のかかわりもないように立っている。テールレスの間に対して彼は、「そんな事、なにもなかった。だって、ほんの一瞬のことだもの。何も感じない、何も考えない。あつという間に、そうなっちまったんだ。」と答える（Seite 109）。そして、テールレスは地団太をふむ。自分の内側にあるものを、他ならぬこの少年の口より聞かなくては、彼は満足しないのである。

これがまさに、ムージルの体験を求める、やり方である。

1908年より、ムージルはおよそ2年半をかけて、「愛の完成」(“Die Vollendung der Liebe”),「静かなヴェロニカの誘惑」(“Die Versuchung der stillen Veronika”)という二つの小説(Erzählung)を書き、それらに「結びつき」(Die Vereinigungen)というひとつの標題を与えた。結びつきとは、現実を超えた境における愛の合一である。だが、この二つの小説はいずれも、女性の常識的には不貞(Untreue)とされるべき出来事をあつかっている。しかも、それは恋人や夫との愛のない生活より自分を解きはなち、真に愛し得る別の人間を求めるという体験ではない。恋人なり、夫なりとの真の結びつきを情熱的に求めているヒロイン達は、彼らのもとを離れて三日とたたぬうちに、他の男に、しかも彼女達にとって偶然な男に、身をゆだねるになるのである。すなわち、愛とか結びつきという精神的価値を否定するのにもっともふさわしい出来事なのである。

恋人との結びつきを求めながら、姦淫をおかすという事が、いかにして起るのか——このような、かなりイローニッシュな視角より、連作はまず始められた。1909年、ムージルは「魔法をかけられた家」(“Das verzauberte Haus”)という小説を、雑誌の注文に応じてかなり短期間に書き上げ、おおよけにした。それは、ひとりの内面的な女が、恋人を死なせる事によって永遠の結びつきを得ようというあまりに精神的な試みのはてに、彼女にとっては獣でしかない他の男に絶望的に身をゆだねるという、出来事を持っている。まず、あるふい屋敷にたまたま宿を借りているある将校がとなりの室より男と女の緊張したやりとりを耳にする処より、小説は始まる。男が女に愛の確認を求めている》Sie lieben mich?《。女は》Nein《を叫ぶ(S. 147)。そして、男は「あなたが拒むなら、私は今日ここを立って、明日のうちに命をすててしまう」、という。女はいよいよ懸命な》Nein《を叫べ。第三者の男はこの屋敷の女を思い浮べ、あのような女がどうして、このような情熱の対象となり得るのか、と訝かる。

ヒロインのヴィクトリアは長い家柄の最後のひとりであり、たえず僅かずつ崩れて行くように不気味な音をたてる屋敷の孤独な暮らしの中で、老嬢になりかかっている女である。この女の生活に、ながい孤独の後、ひとりの男がやって来て、彼女は自分の生命感が甦り始めるのを予感する。だが、孤独の中で育てられて来た自我は、たとえその生命の貧しさが彼女を苦しめるにせよ、他の存在によってたやすくは奪わせない。とくにこの男、ヨハネスはきわめて豊かな内面の持主であり、自己をあらゆる物事を中心とするような、調和的な存在をいとなんでいる。自分自身の存在感のとぼしさをかなしむヴィクトリアには、このような自己の内における調和はほとんど苦しみを与える。そして、ヨハネスの愛を受け入れる事、それは彼女のほうより一方的に、彼の存在に屈することでしかなかった。

このような内面的状況より、男が去り、女の愛の試みが始まる。女は男が死ぬという確信の上に、彼女の夢想を築くのである。まず、男が去った瞬間より、男との関係は彼女を苦しめるものを失って、永遠なものにかわる。また、男が彼女のために死ぬという意識は

女にはじめてつよい存在感を甦らせる。男が命を絶ったと感じた瞬間、強い、秘やかな感情が女の上におりて来る。女は室中のすべてのあかりを点し、男の写真を前におき、はじめて《Du》とよびかける。そして、その夜は女にとって、ながい期待の実現の夜となった。すなわち、失われた記憶のような自分の存在をとりもどし、さらに、そのような存在感をこえ、無限の境で永遠の結びつきを体験すべき夜なのである。物たちも彼女を中心としてそれぞれのあざやかな存在を営みはじめ、しかも、個々の存在であることをやめ、異った空間においてひとつのなる瞬間を、緊張して待っているかのように見える。

だが同時に、それは現実の攻撃より夢想をまもる、たえざる緊張でもあった。男を殺したのだという反省、生きた人間を愛さなかったという苛酷さの意識、さらに、屋敷のなかの第三者の存在、時間に侵蝕されて行く屋敷そのもの、これらすべての現実が彼女を責めたてる。それに対して、彼女は夢想をいよいよ強め、現実のおよばぬ処に入ってしまう事によって、自分を正しとしようとする。しかし、それは出来ない。結局、圧倒的な現実を前にして、彼女はけして現実とはならぬ、とらえがたい予感をなおかつだきかかえるように、自分の孤独の中にうづくまるより他はない。

そして、明け方に、男より無事を知らせる速達が来て、女の夢想を一気に砕く。男は女との夢想より、おもての現実、「街頭」にのがれ出てしまったのである⁽²⁾。そして、男が彼女のために死ななかったという事実だけは、現実を抹殺する女の夢想も克服出来ない。というのは、彼女の夢想は現実をこえて展開しながら、ひとつの事実、男が死んだという事実にもとづいていたからである。この夢想の坐折の後、きわめて女性的に、何かを求める行為だけがさらに展開して、官能的なものの中に入る。すなわち、静かな秩序をやっと保っているかに見える現実を、官能の狂気の中で一気に崩壊させ、そこから何が生じるかを見たいという欲情が、彼女をとらえるのである。

この小説を支配している考え、すなわち、恋人の実際の存在を超えることによって、愛を永遠なものにするという考えは、勿論、ムーヅルにおいて始まったものではない。また、恋人の実際の存在をあえて犠牲にするというテーマも、とくにムーヅルのものとするべきではない。さらに、それを女にあてはめるという事も、とくにムーヅル的なものではなく、もっと一般的に、現代における精神のある欲求のあらわれという事が出来る。すなわち、一切を精神性によって支配しようという、孤独で尖鋭な欲求である。というのは、極端の精神性は男においてではなく、女において実現された時、もっとも強く人間の現実をゆする力を持つのである。女というものは一般的に、とくに精神によって、精神性には侵蝕され難い存在として見なされている。精神は女の中に、盲目なもの、言葉を不要とするもの、偶然に平然とゆだねられるものを見る。だが同時に、精神はそのようなものをたんに現象として、出来事として眺め、それとは別の処に、やはり盲目で無言ではあるが人間的な、自明な価値に根ざした女性の本質を、彼自身の苛酷な論理性や虚無への傾向に対するひとつの救いとして、期待しているのである。それ故、このような女の存在を

も、極端な精神性でみたすという事は、精神にとってもっとも危険な、また、現実を精神性で分解して新しい現実を得るという自己の論理にもっとも忠実な行為なのである。

それでは、ムージルのものとは一体何であろうか。それは、女の中に苛酷な精神性を置く時、女の存在を精神的なものへと昇華させてしまわず、あくまでも irrational な官能性の中に留めるという事である。ヴィクトリアのまわりに、消えたりそくの香りのようなものがたちこめている。だがまた、彼女は大きな、官能的な口を持っている。そしてムージルはもっとも精神的なものを、きわめて女性的な官能によって反応させるのである。だが、このような、官能性と精神性の、すこしも現実らしく和らげていない対照は、まだ真にムージルのものではない。真にムージルのものは、それらが出来事の中でひとつのものとして体験されるという期待、そして、その体験がいかにして起るのかという冷やかで、熱烈な好奇心である。

このような傾向をいっそういちじるしく見せるのは、「愛の完成」である。それはヴィクトリアの物語よりさらに一步すすんで、愛の合一を求めるが故に、他の偶然な男に身をゆだねるという、試みとなった。「結びつき」を求めるヒロインのクラウディネは行状の上から見れば、きわめて身持ちのわるい女なのである。彼女の中には、偶然なものに対して身を守る弱さ、さらに、あえて偶然の中へ自己を投げ捨てるという、屈辱への情熱があって、それが現在の夫に至るまで彼女をしてくりかえし、偶然な男性の支配下に身を落させた。だが、彼女は男への完全な隷属からも、何事もなかったように脱け出して来る、とムージルはいう。男達にすべてを捧げ尽している最中でさえ、これらは本質において自分とは何のかかわりもないのだという意識が、彼女を去らない。そして、このような不可解な自己意識の源として、ムージルはこの身持ちのわるい女の中に、出来事によってはすこしもふれられぬ、またみずから決して現実とはならぬ、かすかな内面性をおくのである。

物語は、クラウディネが夫のもとを離れ、以前の男達のひとりとの間につくった子供がある遠い施設に訪ねに旅立つところより始まる。彼女は夫の同行をせつに願う。だが、夫は片づけなくてはならぬ仕事があるからといって、家に留まる。

現在の夫は彼女にとって、偶然な男達のひとりではなかった。彼女は夫とともに、外の世界に対して、第三者達の混乱に対して、また、その中におけるドン・ジュアン的な孤独に対して、緊張にみちた現実を囲っていた。おもての虚無と孤独の認識は彼らの結びつきの秘訣であり、内部のごくわずかな動揺に対する敏感さは彼らは二人の存在をいっそう生々しく感じさせる。彼らはお互なしでは生きられぬと思っていたのである。だが、このような結びつきを崩そうとするものはあるきわめて精神的なもの、絶対の結びつきへの憧憬である。夫のすぐそばにしながら、彼の思いおよばぬことを考えることがある、これだけ

のことが彼女を絶望させた。そして、彼を遠くにおしのけて、ひとり地に体を投げ出すという想像は、それも可能だというだけで、すでに彼女の現実を侵蝕する力を持っている。⁽³⁾

それは彼女にとっておそらく結婚以来はじめての、ひとり旅なのである。まず、訪ねて行く子供のことより、過去の回想が生じる。停車場で見知らぬ人間達に囲まれていると、不快感と自負心の底で、自己放棄の欲望がかすかに動く。汽車に運ばれて行くという不安の中で、たったひとりで異った体験のもとにいるという快さが、彼女をつつみはじめる。そして、実際にひとりの男がたまたま彼女の側にあらわれ、凡庸な情欲で彼女を求めはじめる。せまい馬車の中で男達に体をつきあわせて坐りながら、彼女はこのような男達にも、ただ彼らがそこにいるというだけで、肉体を支配され得るのだと考える。さらに、大雪が彼女をそのような男達と共に、外界より隔絶された世界に閉じこめる。

典型的な姦通 (Ehebruch) の状況である。実際に、夫と二人であるという現実が崩れ出す。まず、不快感をそそる男達の間で、あるいはこういう人達と暮らす事も出来るのかも知れぬと、彼女は思う。それは虚無への情熱の最初のあらわれである。やがて、虚無の認識に秘訣を得ていた夫との生活は逆に、無限なものへの可能性に自らを閉じた小心さ、やはり偶然にもとづくひとつの虚偽としか思えなくなる。むしろ、人間にとって、それぞれの瞬間はひとつの深淵なのだと、彼女は考える (S. 185)。そして、男達のひとりの体臭が彼女をつつんだら、彼女自身、その時自分が行くとおりのものに実際になるだろう、と考える。》…daß sie…auch das, was sie dann täte, wirklich wäre…《 (S. 185)

しかし、ムーゼルがそれでもってあらわそうとするのは、姦通の心理でも、価値の不確かさのイローニッシュな認識でもない。先に述べたように、クラウディネはあくまでも、夫との結びつきを求める女である。また、出来事そのものは女のきわめて官能的な動揺によって展開するが、その底にあるものは、人間的存在を凍結させるような精神性の孤独なのである。そこには、現実より虚無に落ち、そこで無限なものを体験しなくてはならぬという、ひとつの論理がある。これに従って、ヴィクトリアは彼女の恋人を死なせた。だがクラウディネは夫の存在を宿す自分の肉体を、あえて偶然な男におかせ、それによって現実をこえようとするのである。

私がこのけだものに屈服しているのだと、現実の中ではあなたも感じないわけにいかぬよう、この想像もつかぬ事を感じないわけにいかぬよう、私は姦淫を犯すのです。現実の中ではあなたも私をもう頑なに、単純に信じられぬよう、あなたが私を手放した途端に、私があなたにとって不可解に、虚像のように不確かになってしまうように。 (S. 186)

このようにして、不貞とは彼女にとって、いままでの、夫との不安な密着に代って、互に孤独に相並びながら無限につき合っていくという、夫との新しい関係なのである。だが、このような厳しい試みの間、彼女の官能は彼女の近くにいる偶然な存在によって掻き立てられ続ける。しかしまた、夢が高まり、一さいの矛盾を *lyrisch* なものの中に失

わせてしまう瞬間もある。すると、夫は現実的な存在を弱め、遠い「恋人」の存在に、「境界を越えて吹き寄せられて来て、遠く星のようにふるえる音楽のひととき」のように彼女を求める存在に重なってしまう (S. 179)。この「恋人」に対して彼女は、

「私達はお互を知る前より、お互に不実でした。」 (“Wir waren einander untreu, bevor wir einander kannten.”) (S. 180)

と呼びかける。何故なら、「私達は知り合う前より、お互に愛し合っていた」からである。この言葉をもって、彼女の愛は時間の制約をこえて拡る。そして、「不貞」という行為は、もはや姦淫ではなくなり、何か無限な行為となる。

Und da begann sie, ganz weh und ferne, wie ein Wind über regenschwarze Felder kommt, begann sie zu denken, daß es eine regenleise, wie ein Himmel eine Landschaft überspannende Lust sein müßte, untreu zu sein, eine geheimnisvoll das Leben schließende Lust.

(そして、一陣の風が雨に黒くぬれた野を渡って来るように、悲しほど遠くより、彼女は考え始めた。不貞である事、それは降る雨のようにかすかな、天空のように野山を張りおおす悦楽に違いない。神秘に生をとどす悦楽に違いない。)

姦淫と愛、偶然なものへの屈従と極端の精神性、このような対立物の、ほとんどあり得そうにもない共存、それがムージルの作品に不安な緊張を与えている。これらのもののばいわば途方もない対立に苦しみながら、ある未知な体験において、ひとつに結びつく事を求めている。そして、この願望が現実によってはみたされぬ処で、あまりに激しい緊張より、ある *lyrisch* なもの、「かすかな音楽」のようなある予感が生じるのである。作品は、各々このような構造を持ち、それぞれ詩的に完成されているといってよい部分より成立っている。しかし、それはあくまで静的な調和であって、いかに縲りかえし、いかに鋭くしたところで、それだけでは最初にあった》それはどのようにして起るか《(Wie geschieht es?) という問をみたす事は出来ない。この問は、出来事を語る事によって内面的にはこえられぬ矛盾がこえられ、思いがけぬ体験が得られるという確信を含んでいる。この点でムージルは小説家であった。それ故、彼は姦淫に傾いて行く女の内面が呈する深さや、*lyrisch* なものにおいて作品を完成させず、彼女の上に実際にそれを起らせて見るのである。

それは実際には、クラウディネの旅の三夜目に起る。しかし、ムージルは彼女の不貞の体験を、その前の夜において試みている。その夜、夫婦生活の虚偽について思い耽りながら、ちょうど着物を脱ぎおえたクラウディネは、たまたま彼女を求めに来た男と、扉一枚へだてて対するのである。屈辱への欲情が彼女の肉体をみたす。そして、彼女は毎夜見知

らぬ人間達の足に踏まれたホテルの絨毯の上に、四つ這いになり、裸身をおしつける。しかし、扉の留具ははずされないし、また、互に合図ひとつかわされない。扉のむこう側で男は彼自身の欲情にみたされて立っており、こちら側では、彼女は彼女自身の欲情の中でなおかつすこしも失われぬ例の内面でもって、自分の肉体の美味に感じ耽っている。そして、そのまま男は立ち去る。

この時、クラウディネは、これが不貞なのだと思うのである。だが、それはむしろなされなかった体験についての、自分自身に対する非難である。彼女は、それは実際に起り得たのだという事の前で、ただ偶然によって危険を脱れ得たもののようにふるえる。すると実際には起らなかった不貞の情景があざやかに、淫らに彼女の眼前に浮び上る。しかも、彼女は同時に、何事もなかったように夫のもとにかえり、「お前を内側から感じとれない」、という夫の問に対して、「ほんとうに、何もなかったのよ」(Glaub mir, es war nichts gegen uns《)と微笑むより他はない自分をも思い浮べるのである(S. 195)。この意味では、不貞は彼女にとって忌まわしいものだった。すなわち、実際には不貞は起らなかった。だが、たんに内面的なものにおいては、それは起ったも同然である。しかしまた、それはその逆の場合、出来事が内面にふれずに、ただ起ったという場合と同じなのである。つまり、出来事が思いがけぬやり方で内面の何かを変えなかったという意味では、まだ何も起っていないのである。

それ故、ふたたび男が扉の前に忍んで来る。そして彼女は、扉まで這い寄って留金をはずさなくてはならぬ、と考える。ここで、何かが真に起るべきなのである。すなわち、姦淫による愛の獲得という冷やかな逆説が、クラウディネという女によって行為され、ひとつの体験となるべきなのである。しかし、彼女はそれを行う事が出来ない。これらすべては以前の行状への逆もどりに過ぎぬのかも知れない、という考えがそれだけで彼女の手足を抑えつけ、身動きを許さない。そして、行為にならぬ緊張より、彼女はふたたび遠い「恋人」に呼びかける。扉一枚むこうの存在に現に欲情を掻き立てられながら、彼女はるかより彼女を求める存在にむかって、彼のもとへ行くために、この偶然な男に扉を開く力を自分に与えてくれるよう、さけぶのである。

“Wir kamen aufeinander zu, geheimnisvoll durch Raum und Jahre, nun dringe ich in dich ein auf schmerzhaften Wegen.” (S. 196)

「私達はおたがいを求めてやって来ました。空間と年月を秘やかに通り抜けて。そしていま、私は苦しい道を通して、あなたの中へはいり込もうとしているのです。」

結局、「どうしても出来ない事がある。なぜだか判らない。それはおそらく何よりもたいせつな事なのだ。何よりたいせつな、という事は判っているのだ。」、という彼女のつ

ぶやきをもって、クラウディネの試みは挫折する (S. 196)。この試みにおいてもやはり驚くべき対照、ひとつに結ばれぬ緊張より生じる抒情性という、あの調和がまた成り立ったのに過ぎなかったのである。

この挫折の後に出来事が実際に起っても、それはムーゼルの求める体験の成就ではない。不貞はこの後、クラウディネの冷やかな孤独の中で、いわば沈黙のまま起るのである。それは、ムーゼルが《Allein mit Geschehen》とか、《Allein mit fremdem Geschehenisse》とかいう言葉であらわす孤独であって、見知らぬ出来事に黙って身をゆだね、しかも、その影響をあまりの孤独の中で無力にできてしまつて自己の本質にはふれさせぬという、冷やかで淫らな態度である。このような孤独の中では、出来事は個人的なものである事をやめて、獣に起るようなもの、その意味で抽象的なものになってしまう。しかも同時に、孤独な内面がそれを冷やかに眺めているのである。クラウディネは彼女の室に入り込んで来た男の、「それでは、お前は私が好きなんだね」、という問に、「いいえ、私はあなた (Sie) のそばにいるという事が、好きなのです。あなたのそばにいるという事実が、偶然が、好きなのです。エスキモーの男のそばに坐っているのだっていい……」 (S. 199)、と答える。このような孤独に対して、彼女に《Du》といわせようという男の骨折りは、滑稽なものになってしまう。そして、彼女は男に身をゆだね、嫌悪にもかかれらず、官能の快楽が体を満たして来るのを感じる。そして、小説は次のような結びを持っている。

Aber ihr war dabei, als ob sie an etwas dächte, das sie einmal im Frühling empfunden hatte: dieses wie für alle da sein können und doch wie für einen. Und ganz fern, wie Kinder vom Gott sagen, er ist groß, hatte sie eine Vorstellung von ihrer Liebe.

(しかしその際、彼女は何時か春の日に感じた事を、思い出したような気がした。すべての人々のものであるかのように存在しながら、しかも同時に、ひたすらひとりのものであるかのように存在することも可能なのだ、という事である。そして、はるか遠くに、ちょうど子供らが神のことを考えて、神様は偉大なんだというように、彼女は彼女の愛を思い浮べた。) (S. 199)

新しい体験という意味では、クラウディネには結局にも起らなかった。そもそも、クラウディネという人物は始めより終りまで、ひとりの女ではないのである。そこにあるのは、たんに女性的なものの、イデーに対する不条理な反応でしかない。ムーゼルの、女の不貞という出来事はそのような女性的官能に、極端に精神的なものを置く試みである。しかし、それはどのような内的必然性より生じて来たのだろう。女の不貞という出

来事を通じて、新しい体験を求めなくてはならぬ内面性とは、どのようなものであろう。

ここで、ムージルの作品における男と女の間をさらに考察して見る必要がある。《ヴィクトリア》と《クラウディネ》はいずれも、男と女の対話より始まる。それから、男が背景に退いしまい、女の体験がひとり展開する。だが、行為するのは女ではあるが、その行為を見つめる眼、つまり、作品のペルスペクティブには、むしろ背景の男の存在がより強く感じられる。

まずヴィクトリアの物語において、女のあの試み、恋人の現実の存在を抹殺することによって永遠の結びつきを得るという試みは、男より与えられ、男によって挫折させられた、といえる。冒頭の、自殺云々の言葉は決して絶望した男を示してはいない。むしろ、それに続く、「あなたが僕を愛している事を、僕は知っている。明日になれば、あなたもそれを知るだろう」、という言葉は冷やかな響きを持っている (S. 147)。それは、とりかえしのつかぬ喪失という意識によって、自己の存在を女の中で永遠なものにしてしまおうという夢想、夢想の現実に対する恣意、を意味している。しかし、女はこの夢想に、男の予期以上に忠実に従って行為し、男の思いがけぬ体験に至るのである。クラウディネにおいては、男は冒頭で女をひとり旅立たせたきり、背景に退いてしまう。だが、女ははじめに、彼と一緒にではなくては行きたくないといっているのである。このように、やはり男によって（ほとんど意識的にはないかと思われるように）きっかけを与えられた体験を、ムージルはここではあくまでも女の体験として、小説的に展開させようとした。だが、すでに見たとおり、男の精神性の極端を思わせる、冷やかな可能性の認識と神秘的な予感との調和が、作品の各部を完結させ、出来事の思いがけぬ、いわば女性的な展開を妨げている。

このクラウディネの物語はヴィクトリアの物語よりはじめにテーマを与えられながら、その執筆中にすでに、《ヴィクトリア》の改作の必要をもたらした⁽⁴⁾。このようにして生じたのが、「結びつき」の第二作、「静かなヴェロニカの誘惑」である。《ヴェロニカ》は旧作より人物をそのまま（ただし、ヴィクトリアはヴェロニカとなる）、それと、ヨハネスが去った後の部分をおおよそそのまま、受けついでいる。しかし、それより前の部分は量的に旧作の三倍以上に拡大されたばかりでなく、ペルスペクティブの曖昧な旧作に対して、別れた後の男と女の並列的な回想として試みられている⁽⁵⁾。しかも、男の夢想に対する女の不可能な反応の意味を知ろうとする、男の回想の部分が大きな比重を占めているのである。

まず、ヨハネスははっきり、精神性の極端における存在としてあらわされている。彼の存在は、とらえ難い予感に耳を澄ますという、内面的な緊張のみにみたまわっている。彼はその空虚な存在を、ある異った現実より来るかすかな気配にむけて、だんだんに傾けて行くようにしてのみ、生きているのである。

あたかも、熱病のもとの明るさを思わせる春の日、物達の影が物達をこえて這い出しそして静かに、小川に映る像のように、動かぬながら何処かへむかってなびく時、物達が時おりみづからゆらゆらと伸び出すように……

(……wie die Dinge manchmal sich verlängern, an fieberhellen Frühlingstagen, wenn ihre Schatten über sie hinaus kriechen und so still und nach einer Richtung bewegt stehen wie Spiegelbilder im Bach.) (S. 201)

このような内面に、現実的なものは力を及ぼす事が出来ない。女の面前で、もうひとりの男に顔をなぐられるという屈辱も、一瞬のちには「親しい不安」となって、内面の調和に組み入れられてしまう。そして、ヴェロニカの体験にきっかけを与えた言葉、「私は行ってしまう。きっと、多分、私は死ぬだろう」という言葉もひとつの決心ではなくて、ひとつの夢想、それ自体のものであって、現実とは何のかかわりもないものなのである⁽⁶⁾。

ヴェロニカは、空虚な存在を傾けさせるような予感を理解する女として、あらわされている。長い家柄の最後のひとりとして、彼女は精神性の極端のそれに通じる空虚さに定められていた。

……私達の庭——夏のさなかにさへ、もし雪の上に横たわったら、こんな気持ちに違いないと、私は考える。そんな風に慰めのないまま快適で、下からしっかり支えられる事もなしに暖かさと冷たさの間に漂っている。跳び出したい気持ちになる。でも、またぐったり快い流れの中にとけ込んでしまう。(S. 206)

しかし、彼女は生への必要に迫られているのである。このまま老嬢になりたくないのならば、何らかの行為をしなくてはならない、「何かが起らねばならない」、と彼女は感じている(S. 205)。そして、そのようなヴェロニカにとって、あの存在を傾けさせるような予感は、ヨハネスとは異った不安をあたえるのである。ヨハネスは、「それは神だ」、という。すると、ヴェロニカはそれは理解しながら、「けだもの」のことを考える。

「……(あなたのいう)神とは、私をむりやり彼女の乳房に接吻させる、太った意地悪な、女でもあるし、また、時おりひとりでいる時、戸棚の前で腹這いになって、そんなことを考える私でもあるのよ。」(S. 207)

また、彼女はヨハネスのせん細で、空虚な生き方を、》*allein mit geschehen*《といい、》*unpersönlich*《といい、そして、あの獣的なものをすっかり奪われてしまったかに見えるヨハネスを「けだもの」と呼ぶのである。

「……………あなたはどうか考えるの、私の考えでは、いやしくも人間なら、それ程に unpersönlich になり得ない。けだものだけがそうなのよ。助けてちょうだい。なぜこの事を考えると、私は何時もけだものに思いあたるのかしら。」(S. 207)

そして、ヨハネスはそれを理解しない。

まず注目すべき事は、これらの言葉は、》allein mit geschehen《といい、》unpersönlich《といい、》Tier《といい、すべて女たちの、姦淫への傾きのもと孤独をあらわすのに使われたものであり、それがここでは男の、精神性の極端における虚無をあらわしているという事である。女の官能によって抽象化された存在と、男の精神によって抽象化された存在が、いずれも「けだもの」と呼ばれているのである。この事より、これらの女達の出来事は男の精神性の虚無に源を持っていると、いう事が出来る。すなわち、男の精神性の虚無が、女において出来事として、驚くべき姿をとったのである。そして、その背後には、精神性の極端はその虚無によって、獸的な Irrationalität に通じるという認識がある。

だが、次に注目すべき事は、ヨハネスは彼の「けだもの」を理解せず、ヴェロニカのみがそれを理解したという事である。実際に、「けだもの」の脅威はヨハネスにはふれず、ヴェロニカのみを思いがけぬ体験まで連れて行ったのである。ヴェロニカに愛の試みを与えたのはヨハネスであったが、いかに驚くべき可能性であったにせよ、それはヨハネスにおいては夢想でしかなく、何の行為にもつらなっていなかった。ところが、ヴェロニカは夢想でしかないものを、行為とせざるを得なかった。そして、行為であるが故に、それはヨハネスの夢想のおよばぬ処まで展開したのである。ヴェロニカに「けだもの」を理解させたのは、このように行為せざるを得ない自分への不安であり、たしかにヨハネスにはないものであった。

すなわち、irrational なものは、たとえ精神性の極端においてもっとも鋭く現われるにせよ、何らかの行為にせまられていない者にとっては、何かを変える力とはならない、それ故、真の不安はあたえないのである。これを押しすすめると、精神は自己展開的にはその極端をこえて新しい体験に至る事が出来ない、といえる。精神性を孤独に展開して虚無にまで至り、そこで irrational なものにより極端をこえて新しい体験を得るという行き方を、精神は内面的な閉鎖よりのただひとつ屈辱のない解放として、まもって来た。しかし、極端における虚無はそれ自体ひとつの調和であり、いかに irrational な可能性の認識も行為につながっていない以上、全体の調和に組みこまれてしまい、けつして存在をゆするようなものになり得ないのである。

そこで、内面的な閉鎖より真の体験に至るには、まったく精神的であるはずの認識や予感を、直接的な行為によって、全存在をもって応じてしまうような、狂おしい、不条理な存在の助けが必要となる。それがムージルにとって、女であった。ムージルの女とは、男

においては全体の調和を織りなすひとつの夢想しかない可能性を出来事としてしまい、それによって最初の夢想を不可解に超えてしまうものなのである。しかし、女はそれ自身のように irrational な存在でありながら、その貞操において、その不変な生活感情において、彼女が住む世界の価値の現実を体現している。それ故、内面的に認識された、驚くべき可能性を女において起らせて見るのは、認識のもっとも厳しい試練、つまり、その体験に他ならないのである。

このような意味で、ムージルのこれらの作品の、女の不貞という出来事は、精神による実験であった。そして、それは人間的な体験へのひとつの冒瀆であるかも知れない。ムージルはクラウディネという女の上にあのような出来事を起らせておきながら、彼女をひとりの女としては描き得なかった。小説家というものは出来事を描く以上、それを十分に人間的な体験によってみたくなくてはならない。そのような出来事に対する誠実さの中に、思想家や詩人と異った、小説家の人間的なものがあるのである。

しかし、ムージルにおいて、出来事は精神によって設定されながら、いわばひとたび起ると、最初に認識された可能性をこえて、未知なもの、不可解なものとして、ムージルに驚きを与える。そして、ムージルはまたそのようなものとして出来事を求めるのである。彼の作品を通じて、ヒロイン達の体験を眺める男達の執拗な眼が感じられる。男達は彼らの女達の体験を自分の内面において再構成しながら、さらにそれによってはとらえられぬもの、彼らの内面をこえる《新しいもの》を感じて、出来事を眺め続けるのである。これが作品のペルスペクティブであり、ムージルの出来事に対する態度である。ちょうど恋人の体験に嫉妬と憧憬を感じるように、内面的な精神が出来事に対してしているのである。

Text. Gesammelte Werke in Einzelausgaben : Prosa, Dramen, Späte Briefe. Herausgegeben von Adolf Frisé 1957, Hamburg

Kommentar

(1) Seite 109

《Nicht meine ich so》……《ich frage : wieso – wie konntest du das tun, nie fühltest du dich ? Was ging in jenem Augenblick in dir vor ? 》

(2) Seite 157

Es stand noch anderes darin, aber sie sah nur dieses eine : was sind Sie, ich fand auf die Straße.

(3) Seite 115

《Ich hätte dich nehmen mögen und in mich zurückreißen … und wieder dich wegstoßen und auf die Erde werfen, weil es möglich gewesen war…》

(4) Gesammelte Werke : Tagebücher, Aphorismen Essays und Reden. Vermächtnis II, S. 805~S. 806

(5) Tagebuch – Heft5. 19. Angst 1910. S. 122~123

(6) S. 208

Und da faßte ihn wieder dies, was eigentlich kein Entschluß war, sondern eine Vision, nichts was sich auf die Wirklichkeit bezog, sondern nur auf sich selbst wie eine Musik, er sagte : <<Ich gehe bort ; gewiß, vielleicht werde ich sterben.>> Aber auch da wußte er, daß es nicht das war, was er meinte.